



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	知床ウトロ地区 ヘリテージトレイル Fコース (弁財チャシ～知床漁業発祥の地 : F01～F16) : スポット解説文集
Description	製作 : 北海道大学アイヌ・先住民研究センター「先住民族ヘリテージツーリズムWG」, 北海道大学観光学高等研究センター「次世代ヘリテージツーリズムWG」; 編集 : 山村高淑, 張慶在; ガイド音声 : 加藤由々; 主催 : 北海道大学アイヌ・先住民研究センター「先住民族ヘリテージツーリズムWG」
Relation	先住民族ヘリテージツーリズム ウトロモニターツアー 配布資料. 2011年9月20日 (火). 斜里町ウトロ, 北海道.
Issue Date	2011-09-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47839
Type	lecture
File Information	UTORO Heritage Trail F.pdf



知床ウトロ地区
ヘリテージトレイル
Fコース

弁財チャシ～知床漁業発祥の地：
F01～F16

スポット解説文集

2011年9月20日

- 【製作】 北海道大学アイヌ・先住民研究センター「先住民族ヘリテージツーリズムWG」
北海道大学観光学高等研究センター「次世代ヘリテージツーリズムWG」
- 【編集】 山村高淑（北海道大学観光学高等研究センター）
張慶在（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院）
- 【ガイド音声】 加藤由々

F01 弁財チャシ

弁財チャシ（べんざいちゃし）はオシンコシンの滝のあるオシンコシン崎（おしんこしんざき）と亀の形をしたチャシコツ崎（ちゃしこつさき）の間にある弁財崎（べんざいさき）の上にあったチャシです。

チャシとは、アイヌ語で「砦（とりで）、柵囲い（さくがこい）」¹などという意味で、戦闘の際の砦や避難場所、物資の保管場所として利用されたとし、多くの場合、溝や堀で周囲と区切られています。

弁財チャシ跡（あと）は、残念ながら、現在では国道が通っているため一部が削られています。しかし、岬の上には標高 70m ほどの場所に深さ 1.2~1.8m ほどの 1 条の堀²で仕切られた空間があります。

チャシのある弁財崎（べんざいさき）とオシンコシン崎（おしんこしんざき）の間にある湾は弁財湾と呼ばれています。1955 年（昭和 30 年）に記された「斜里町史（しゃりちょうし）」は、弁財湾と名前の由来を、アイヌ語の「ベンザイ・アサム（benzai・asamu）」＝「弁財船の・底」であると記しています。アイヌの祖先神（そせんしん）³、つまり祖先である神の船が、このあたりで壊れ、その船底が沈んで岩となったという伝承⁴や、北へと逃れた源義経の船がこの辺りで遭難した際、沈んだ船底が岩になったという伝承⁵が残されています。

また、弁財崎（べんざいさき）とチャシコツ崎（ちゃしこつさき）の間にある湾は「フンベ湾」と呼ばれ、そこに流れ込む川は「フンペ・オマ・ペツ（hunpe・oma・pet）」＝「クジラの・入る・川」と呼ばれています。フンベとはアイヌ語でクジラのことです。現在でも知床半島付近ではクジラやイルカを見ることができますが、一説には、昔、この河口にクジラがあがったのでこう名付けられたのだと言われています⁶。

¹ 知里真志保(1984)『地名アイヌ語小辞典』, p. 15。

² 宇田川ほか編(1985)『北海道のチャシ集成図 I (道東北篇)』, p. 41。

³ サマイクル

⁴ 斜里町史編纂委員会編(1955)『斜里町史』, p. 867。

⁵ 斜里町立知床博物館協力会(1986)『郷土学習シリーズ第 8 集 地名探訪しゃり』, p. 40。

⁶ 斜里町立知床博物館協力会(1986)『郷土学習シリーズ第 8 集 地名探訪しゃり』, P. 41。

F02 チャシコツ岬下 B 遺跡

チャシコツ岬下 B 遺跡（ちゃしこつみさきした・びーいせき）はチャシコツ崎（ちゃしこつさき）の西側⁷のふもとに広がる遺跡です。約 2,000 年前の続縄文文化（ぞくじょうもんぶんか）から、5～10 世紀ごろのオホーツク文化、9～12 世紀ごろのトビニタイ文化の住居跡や遺物が確認されています。

1955 年（昭和 30 年）に記された「斜里町史」には、「ウトロチャシコツ岬下の西側に 10 数個の大形竪穴群（おおがたてあなぐん）がある。」⁸と記されて（しるされて）いますが、現在その多くは、国道の盛土（もりど）の下に埋まってしまっていると考えられています。

これまで確認されたオホーツク文化の竪穴住居跡（たてあなじゅうきよあと）は、現在の国道のすぐ脇に複数位置していることから、国道の盛土のなかった当時は海岸線に沿って生活が営まれていたことがわかります。

過去に河野広道（こうのひろみち）氏や斜里町教育委員会、北海道大学などによって発掘調査が行われています。その際に出土した遺物には、カエルをかたどった文様（もんよう）のついた土器や、海の獣（うみのけもの）・海獣（かいじゅう）を模したヒグマの牙製のペンダント、黒曜石（こくようせき）で作られた石器などがあります。

住居跡は白い粘土をコの字状に敷き詰めたもので、三分の二ほどが国道の盛土の下に埋まっています。調査によって、少なくとも 4 回建て替えがあり、最後の住居は火災で焼失したことがわかりました。

またそれ以外にも、トビニタイ文化と呼ばれる 10 世紀ころの文化の、ヒグマの骨と土器で構成された、屋外祭祀遺構など、考古学的にも価値の高い遺物・遺構が見つかっています⁹。

⁷ 斜里側。

⁸ 斜里町史編纂委員会編(1955)『斜里町史』, p. 34。

⁹ 今後は周辺に広がる遺跡、特に岬の上の竪穴との関連を中心に調査し、知床半島において人類活動がどのように営まれてきたのかを解明することが望まれる。

F03 チャシコツ崎(亀岩)

チャシコツ崎(ちゃしこつさき)は、斜里方面(しゃりほうめん)からウトロへ入る玄関口に位置しています。その特徴的な形から、地元では通称「カメ岩」とも呼ばれています。「チャシコツ」という名称について、1955年(昭和30年)に記された『斜里町史』は、「チャシコツ・エト」＝「砦の跡・岬」と紹介しています¹⁰。

チャシとは、アイヌ語で「砦(とりで)、柵囲い(さくがこい)」¹¹などという意味で、多くの場合、周囲と溝や堀で区切られます。チャシコツ崎(ちゃしこつさき)の場合もそうで、調査により、堀は、現在国道が通っているところにあったことがわかっています。

周辺には遺跡が多く確認されています。岬の上には現在も窪みとして確認できる多くの竪穴住居(たてあなじゅうきょ)の跡があり、『斜里町史』には、24個の竪穴住居のくぼみが確認できると記されています¹²。岬の下でも斜里側(しゃりがわ)、ウトロ側双方に、竪穴住居跡が見つかっています。主体となるのはオホーツク文化と呼ばれる5世紀から10世紀ごろのものですが、岬の上の遺跡と、下の遺跡との関連性については、まだわかっていません。

なおこのチャシ跡については、昔、オロンコ岩にいたオロッコ人とアイヌが争った時の砦跡である、という伝説も残っています¹³。

¹⁰ 斜里町史編纂委員会編(1955)『斜里町史』, p. 867。

¹¹ 知里真志保(1984)『地名アイヌ語小辞典』, p. 15。

¹² 斜里町史編纂委員会編(1955)『斜里町史』, p. 34。

¹³ 斜里町立知床博物館協力会(1984)『知床半島西岸の地名と伝説』, p. 43。

F04 ペレケ湾

チャシコツ崎（さき）からウトロ崎（ざき）に至る半円状の湾を、ペレケ湾と呼びます。現在は道の駅や知床世界遺産センター周辺の整備により随分と埋め立て地が広がっていますが、もともと綺麗な半円状の弧を描く海岸でした。

さて、現在、ペレケ湾の海岸と国道 334 号線の間には、住宅や民宿が並んでいます。かつてこのあたりはチエトユシ（Chietoy・us・i）と呼ばれていたようです。チエトユシとは、アイヌ語で、我らの食う土のあるところ、という意味とされています。

ここでいう、「我らの食う土」「我々が食べる土」というのは「珪藻土（けいそうど）」のことだそうです。「珪藻土」とは、珪藻（けいそう）と呼ばれる藻類（そうるい）の一種の殻の化石からできた堆積岩（たいせきがん）のことです。特別な料理をつくる際に、動物や魚の油とともに、少量の珪藻土を調味料として加えることがあるそうです¹⁴。

このチエトユシという地名について松浦武四郎は、『知床日誌』の中で次のように述べています。「チエトイウシ、食土（しょくど）、すなわち食べる土、があるという意味。アイヌは草の根を食べる際、この土を少し入れると、草の根の毒に当たらないと言う。この土を探すには、鳥や獣（けもの）が食べているのを見て、それを試しに取る。鹿が好んで食べるそうである。」¹⁵

¹⁴ 斜里町立知床博物館協力会(1984)『知床半島西岸の地名と伝説』, p. 44。

¹⁵ 戊午知床日誌。秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 73。

F05 石錘

5世紀から10世紀ごろにかけて、サハリンから、主にオホーツク海沿岸部の北海道、千島列島（ちしまれっとう）にかけて、「オホーツク文化」と呼ばれる文化が広がりました¹⁶。

こうしたオホーツク文化の遺跡からは、石に溝（みぞ）や孔（あな）をあけて、そこにひもや網をくくりつけ、漁撈（ぎょろう）の際の錘（おもり）として使用する、石錘（せきすい）という道具が数多く出土します。同じような道具は縄文時代の遺跡でも確認されていますが、オホーツク文化のものには、形や大きさのバリエーションが豊富であるという特徴があります。

ウトロの海岸線を歩いていると、現在でも、石の溝を利用して、それらを網（あみ）などにくくりつけ、漁撈の際の錘（おもり）として使用している様子を見かけることができます。石器というと考古学的に発掘した古代の遺物と考えるかもしれませんが、現在使われているこうした石も、立派な「石器」なのです。

¹⁶ 宇田川洋（2009）「擦文・オホーツク・トビニタイ文化」斜里町立知床博物館編『しれとこライブラリー 9 知床の考古』北海道新聞社，p. 160。

F06 知床漁業の歴史～場所請負制～

さて、次のスポットまでしばらく歩きますので、その時間を利用して、ここで北海道における漁業の歴史をお話ししておきたいと思います。

知床を含む北海道における漁業の歴史を考えるうえで忘れてはならないのは、和人にとっての漁業の発達史は、アイヌの人々にとっては、非常に不幸な、苦難の歴史であるという点です。

もともと北海道では、先住民族であるアイヌの人々が、狩猟や漁労（ぎよろう）、植物採集、そして道外やロシアとの自由な交易を行って暮らしていました¹⁷。

しかし、15世紀ごろまでには本州から和人が移住し始め、そのうちの有力者が次第に領主化（りょうしゅか）し、渡島半島南端部（おしまはんとうなんたんぶ）、今の函館周辺を中心に支配権を確立していきます。

そして、1604年（慶長9年）、道南を支配していた戦国大名の松前氏は、徳川家康から、蝦夷地におけるアイヌとの交易の独占を認められます。当時北海道では米はほとんど取れませんでしたから、松前藩では家臣への禄（ろく）、すなわち給料に、米を用いることができませんでした。そこで、松前藩は、徳川幕府から認められた独占的な交易権を道内地域ごとの権利に分割し、主な家臣に分け与えました。これが場所または商場（あきないば）です¹⁸。

場所を与えられた家臣は「知行主（ちぎょうぬし）」と呼ばれ、当初は、年に一度、与えられた場所へ船を出し、アイヌの人々と交易を行いました。そして、そこで得た物品を松前で本州の商人に売ることによって生計を立てていたと言われていました。しかし、次第に蝦夷地の交易が複雑化していく中で、武士である知行主（ちぎょうぬし）には資本的・技術的に、漁場経営（ぎよばけいえい）が手に負えなくなっていくようになります。その結果、交易権を商人に代行させ、知行主は一定の運営金を得るようになっていきました。これを「場所請負制（ばしょうけおいせい）」と言います。

場所を請け負った商人は、当初、知行主と同じようにアイヌの人々との交易を行っていたのですが、次第に商人自らが漁業を行うようになり、アイヌの人々を交易の相手としてではなく、単なる労働者として使役（しえき）するようになっていきます¹⁹。

こうした蝦夷地における場所請負制の成立によって、アイヌの人々は漁場（ぎよば）での過酷な労働や不正な交易に苦しめられるようになっていったのです。

当時、知床を含むオホーツク海沿岸は、全域が「宗谷場所」（そうやばしょ）に属していましたが、その中心地が遠く離れた道北の宗谷であったことから、

¹⁷ 斜里町立知床博物館協力会（2001）『知床博物館第23回特別展 知床の漁業』， p. 22。

¹⁸ 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（2007）『アイヌの人たちとともに～その歴史と文化～』pp. 4-7。

¹⁹ 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（2007）『アイヌの人たちとともに～その歴史と文化～』pp. 4-7。

知床での和人商人による漁場経営（ぎよばけいえい）は本格化していませんでした²⁰。

しかし、1789年、現在の北方領土・国後島（くなしりとう）で、場所請負人の不正に対するアイヌの人々の蜂起が引き金となって、国後島と道東メナシ地方でアイヌと和人との衝突が起こります。これを「クナシリ・メナシの戦い」と言いますが、この戦いによって状況が一変します。

それまで自主性が残されていた国後島や道東のアイヌの人々も松前藩に制圧され、その支配構造に組み込まれてしまったのです。

闘いの翌年、1790年、現在の網走市の能取岬（のとりみさき）から知床岬の間に「斜里場所（しゃりばしょ）」が開設され、斜里の前浜に場所請負人の経営拠点²¹が置かれます。こうして、知床における和人商人による本格的な漁場経営（ぎよばけいえい）が始まったのです²²。

1869年（明治2年）、明治政府により開拓使が設置され、同年9月、開拓使による漁業制度改革の一環として、こうした場所請負制は正式に廃止されました²³。

²⁰ もともこのあたりはアイヌの人々が暮らす土地であり、狩猟や漁労（ぎょろう）、植物採集を行い、年に1回、宗谷（そうや）までやってくる交易船から、熊の皮や鷲の羽などと交換で、金属製品や漆器、陶磁器などを手に入れていた。斜里町立知床博物館協力会（2001）『知床博物館第23回特別展 知床の漁業』、p. 22。

²¹ これを「運上屋（うんじょうや）」と呼ぶ。

²² 斜里町立知床博物館協力会（2001）『知床博物館第23回特別展 知床の漁業』、pp. 22-24。

²³ 関秀志ほか著（2006）『新版 北海道の歴史 下 近代・現代編』北海道新聞社、p. 70。

F07 ペレケ川

知床連山からオホーツク海へ、南から北へと流れ、ウトロ崎（うとろざき）の西側の根本に注いでいる²⁴この川は、ペレケ川と呼ばれています。

このペレケ川が海にそそぐ箇所は、沖から見ると、陸地が大きく裂けているように見えることから、アイヌ語で「ペレケイ」（perke・i、割れている、破れている、裂けている・ところ）と名付けられたという説があります²⁵。

また、松浦武四郎が1858年（安政5年）に著した（あらわした）『戊午志礼登古日誌（ぼご・しれとこにし）』の中に、「ヘケレ」という地名を記していますが、これもペレケ川を指したものではないかと言われています。

「ヘケレ」について同日誌には、現代語訳すると次のように記されています。「一説には、この辺一帯は大きな丸い石からなる浜なのに、この川の両側だけが白砂がある。それが美しいのでヘケレという。ヘケレは『明るい』という意味である」²⁶

アイヌ語地名研究者の山田秀三（やまだひでぞう）氏によれば、「割れている」という意味の「ペレケ」と、「明るい」という意味の「ペケレ」とが似ているので、人によって地名の解釈の仕方が異なる例が道内各地で見られると言います。ひょっとしたら、これまで記されてきた（しるされてきた）ペレケ川の地名の由来に関する記録にも、こうした混乱があったのかも知れません。

では、ここから100メートルほど上流、斜里（しゃり）バス・ウトロターミナルの横にあるペレケ川河岸公園に行って、川のそばまで下りてみましょう。

²⁴ この表現は、尾崎功（2006）『北海道海岸線地名めぐりの旅』北海道出版企画センター，p. 222を参考にした。

²⁵ 斜里町史地名解に依る。山田秀三（2000）『北海道の地名～アイヌ語地名の研究別巻』草風館，p. 223、斜里町立知床博物館協会（1992）『ウトロの自然と歴史（郷土学習シリーズ第14集）』，p. 19、斜里町立知床博物館協会（1984）『知床半島西岸の地名と伝説』，p. 44など参照。

²⁶ 秋葉實（1994）『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協会，pp. 50-51。斜里町立知床博物館協会（1984）『知床半島西岸の地名と伝説』，p. 44にも「昔は、ヘケル<heker>〔明るい所〕とも言ったらしい」との記載あり。

F08 ペレケ川河岸公園

さて、ここから上流に向かって、ペレケ川河岸公園（ペレケがわ・かがんこうえん）が整備されています。上流へ向かって遊歩道が整備されていますので、野鳥の声を聞いたり、植物を見たり、サケ・マスの遡上（そじょう）を観察したりしながら、散策を楽しむことができます。今日はそうした見どころの中から、3種類の動植物を紹介しましょう。

まず、オオウバユリです。

散策路の両側には様々な植物を見ることができますが、もし7月頃でしたら、是非オオウバユリの花を探してみてください。高さ1.5から2メートルくらいに伸びた1本のしっかりした茎に、10個から20個の黄緑色（きみどりいろ）の花をいっせいに咲かせます。

このオオウバユリは、アイヌ語でトゥレプ（turep）と呼ばれ、アイヌの人たちが重要な食料として用いてきた植物です。地下にある鱗茎（りんけい）が食料となる部分で、掘り出してきれいに洗い、臼（うす）でついて、水にさらしてデンプンを取ります。また残った繊維質の多いところは団子にして冬の保存食として利用されていました²⁷。

次はサケ・マスの遡上です。

このペレケ川では、8月になるとカラフトマスが遡上（そじょう）を始め、それに少々遅れてサケも遡上を始めます²⁸。その後、11月頃までサケ・マスの遡上する姿が見られます。

そして最後にカワガラスです。

ペレケ川沿いを歩いていると、「ビッ、ビッ」という高い声²⁹が聞こるかもしれません。そんな時は、川の方を注意して見てみてください。運が良ければ、全身が濃い茶色の羽毛におおわれた全長22～23センチの野鳥、カワガラスが川に飛び込む姿を見ることができるかも知れません。

他にもペレケ川沿いには多くの動植物が生息しています。是非、五感を使ってゆっくりと歩いてみて下さいね。

²⁷ 斜里町立知床博物館協力会(1987)『アイヌ文化・草と樹木（郷土学習シリーズ第9集）』, p. 16。

²⁸ 斜里町立知床博物館協力会(1996)『オホーツク・知床のさかな（郷土学習シリーズ第18集）』, pp. 18-20。

²⁹ 斜里町立知床博物館協力会(1981)『知床の野鳥観察（郷土学習シリーズ第3集）』, p. 30。

U09 ゴジラ岩

皆さんの目の前に、ローソクのような形でそびえている岩は、現在、ローソク岩、あるいはゴジラ岩と呼ばれていますが、もともとはこの辺りはアイヌ語で「ウトルチクシ」と呼ばれていました。「ウトルチクシ」とは、〈ウトル〉＝その間を、チ〈我らが〉、クシ〈通行する所〉という意味だと言われてます³⁰。集落から浜へ、集落から集落へ往来する際、このあたりの岩と岩の間の細い道を通っていたことからこの名前が付いたと言われてます³¹。江戸時代の探検家・松浦武四郎は、知床日誌の中で、「突兀（とっこつ）とした岩の間を、舟が漸く（ようやく）越えると云う義である」と記しています³²。

このウトルチクシが、このあたり一帯の呼称、「ウトロ」の語源であるとされています。

³⁰ 松浦武四郎は、知床日誌の中で、「ウトルチクシ。名義、岩間を船が越る義か」と記している。山田秀三(2000)『北海道の地名～アイヌ語地名の研究別巻』草風館、p. 222。

³¹ 松浦武四郎は、手控（てびかえ）、今でいうフィールドノートに次のように記している。「島岩ニツツ有、其間を通り行が故にウトロチクシと号るとかや」。松浦武四郎著、秋葉実翻訳・編(1858/2007)『松浦武四郎選集五 午手控（一）一～十一』北海道出版企画センター、pp. 294-295。その他、山田秀三(2000)『北海道の地名～アイヌ語地名の研究別巻』草風館、p. 222、斜里町立知床博物館協会(1984)『知床半島西岸の地名と伝説』、p. 43、斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第14集〉』、p. 19などを参照。

³² 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協会、p. 50による現代語訳。

F10 アパッテウシ

目の前に、ウトロ崎（うとろざき）に抜けるトンネルが通っている、ドーム状の大きな岩がありますね。これがオロンコ岩です。オロッコ岩とも呼ばれます。もし、あなたがお越しになった季節が6月下旬から7月頃でしたら、オロンコ岩の断崖には、様々な植物が一斉に美しい花を咲かせていることでしょう³³。

オロンコ岩頂上の平坦な面は標高 58m の高さにあります。実は、この標高、ホテルが立ち並ぶウトロ高台（うとろたかだい）の標高 60m や、チャシコツ崎（ちゃしこつさき）の標高 58m とほぼ同じ高さです。これは、こうした標高約 60m の土地が同じ時代に作られたことを意味しています。つまり、これら標高約 60m の面は、今から 12 万年前、波の浸食作用で作られた平坦な面、これを海食台（かいしょくだい）と言いますが、それがのちに隆起して出来上がった土地なのです³⁴。

さて、このオロンコ岩、もともとは「サマツケワタラ」、アイヌ語で「横になっている岩」³⁵や、「オロクシュマ」、同じくアイヌ語で「そこにすわっている岩」と呼ばれていたと言いますが、このうち「オロクシュマ」が転じてオロンコ岩という呼称になったと言われています^{36,37}。

また、このオロンコ岩の西端は、柱状（はしらじょう）の岩が規則的に並んで横たわる海岸になっています。この場所は、アイヌ語で「アパッテウシ（ap・atte・usi）」、釣り糸を垂れるところ、と呼ばれています。なお、こうした柱状の岩石からなる、比較的規則正しい岩石の割れ目のことを、柱状節理（ちゅうじょうせつり）と呼びます。

ところで、このオロンコ岩には、アイヌとオロッコ人が戦ったという、次のような言い伝えがあります。

昔、この岩の上にオロッコ人が住んでいて、アイヌに対して石や岩を投げたりものを盗んだり悪さを働いていました。これに対し、アイヌは何度も攻めるのですが、岩の上からの攻撃に勝てません。そこである夜、アイヌは一計を案じ、海岸に海藻と砂を積み上げてクジラの形を造り、魚を並べておきました。翌朝、これに鳥が群がっているのを見たオロッコ人、寄りクジラ（よりにくじら）、つまり海岸に乗り上げてしまったクジラだと思い込みます。そこでオロッコ人、アイヌが採る前にあのクジラを採ってしまえ、と岩の上から降りてきます。そ

³³ 斜里町立知床博物館協会(1984)『知床半島西岸の地名と伝説』, p. 42、斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第14集〉』, p. 13。

³⁴ 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第14集〉』, p. 6。

³⁵ 斜里町立知床博物館協会(1984)『知床半島西岸の地名と伝説』, p. 42。

³⁶ 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第14集〉』, p. 19。

³⁷ 三角岩や神社山などこの辺りにあるいくつかの岩をあわせてウオロクシュマ（たくさん座っている岩）となったという説もあり。秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協会, p. 96。

こを待ち伏せしていたアイヌが一齐に攻め立て、オロッコ人を全滅させました。
だからこの岩はいまでもオロンコ岩と言うそうなの…という伝説です^{38 39}。

³⁸ 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第14集〉』, pp. 38-39、秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 96。

³⁹ なお、斜里町立知床博物館協力会(1984)『知床半島西岸の地名と伝説』, p. 43-44 には、昔チャシコツ岬にアイヌがいて、オロンコ岩のオロッコ人と争いがあり、両者最後の激戦地がトンチカマナイである、という説が載っている。

F11 オロンコ岩頂上の考古遺跡

オロッコ人とは、実際どの様な人々であったのか、今では知る術もありません。

しかし、この岩の頂上には、土を浅く掘り下げた炉（ろ）の跡が残されていることが発掘調査でわかっています。炉の跡の他に、土器や石器は発掘されなかったので、正確な年代を判定することは困難なのですが、炉の跡は異なった時代の地層からも出ているため、ここを誰かが継続的に使用していたことは明らかです⁴⁰。

一体どのような人たちがこのオロンコ岩を使っていたのか想像しながら、頂上から知床の風景を見渡すのも良いかも知れません。

⁴⁰ 斜里町史編纂委員会編(1955)『斜里町史』, p. 33。

F12 松浦武四郎記顕彰記念碑

ウトロ港を背に立つこの碑は、江戸時代の探検家、松浦武四郎（まつうらたけしろう）の没後 100 年を記念して、1988 年（昭和 63 年）9 月 30 日に建立⁴¹された「松浦武四郎顕彰記念碑」です。

武四郎は 1818 年（文政元年）に、現在の三重県松坂市に生まれました⁴²。若いころから諸国をめぐり、1844 年、蝦夷地、つまり今の北海道探検に出発した後、数度にわたる蝦夷地の探検を行いました⁴³。その行程は樺太、択捉島まで及んでいます⁴⁴。ここウトロには、1858 年（安政 5 年）、知床岬からの帰路に立ち寄り、番屋に一泊しています⁴⁵。

こうした探検の記録は、蝦夷日誌・紀行として詳細に書き記されていて、江戸時代当時は、蝦夷地を知るための第一級の資料でした。武四郎はこれら日誌の中で、ただ単に、地名や地理、植生、魚類の分布について詳しく記述しているだけでなく、先住民族であるアイヌの人々が置かれた苦しい立場を明らかにし、その救済を訴えています⁴⁶。彼が如何に現地のことを考えていたかを物語るエピソードです。

また武四郎は「北海道」の名付け親としても知られています。1869 年（明治 2 年）、明治政府は「蝦夷地」を「北海道」という名称に変更したのですが、この「北海道」という名称は武四郎の提案に基づくものでした⁴⁷。

武四郎は 1888 年（明治 21 年）、71 歳の生涯を閉じます。その没後 100 年目の 1988 年（昭和 63 年）、縁の地である、ここ斜里町ウトロに顕彰記念碑が立てられたのです。

碑には「知床日誌」から、次の歌が彫り込まれています。

「山にふし 海に浮寝の うき旅も 馴れれば 馴れて 心やすけれ」

蝦夷地の旅を繰り返した武四郎の気持ちが伝わる歌ですね。

⁴¹ 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 96。

⁴² 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 7。

⁴³ 知床には 3 度訪れている。弘化 2 年(1845)、弘化 3 年(1846)、安政 5 年(1858)。秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 7 参照。

⁴⁴ 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 7。

⁴⁵ 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史(郷土学習シリーズ第 14 集)』, p. 20、秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 50、松浦武四郎著、秋葉実翻訳・編(1858/2007)『松浦武四郎選集五 午手控(一) 一～十一』北海道出版企画センター, pp. 284-294 (p. 293 に「番屋庫等有。鱒番屋。止宿す。」とある)。

⁴⁶ 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 8。同書は『東西蝦夷山川地理取調日誌 85 巻』からの引用。

⁴⁷ 佐野芳和(2002)『松浦武四郎シサム・和人の変容』北海道出版企画センター, p. 45, 92。なお武四郎は、道名撰定書の中で「北加伊道」と建白しているため、「厳密に言えば、国名・郡名の命名者である」とする文献もある。松浦武四郎研究会編(1990)『シンポジウム「松浦武四郎」北への視覚』(有)北海道出版企画センター, pp. 270-271。

F13 三角岩

今皆さんが立っているウトロ崎（うとろざき）の先端に、頂きのとがった岩が見えますね。現在「三角岩（さんかくいわ）」と呼ばれているこの岩は、アイヌ語では「オプネイワ」と呼ばれています。

「オプネイワ」とは「槍（やり）の形をした岩」の意味で、岩の形が三角形の「槍の形」に見えることから付けられた名前だと言われています。

かつてアイヌの人たちは、漁に出る際、豊漁を祈って必ずこの岩にイナウ、すなわち木幣（もくへい）を立てて祈ったそうです。

また、松浦武四郎（まつうらたけしろう）は、『知床日誌』の中で、この辺りに「エペルケ」、頭が割れている岩、という地名を記しています。あくまで推測ですが、このオプネイワの頂上、割れているように見える部分がかつてそう呼んでいたのかも知れません。

実は、先ほどみなさんがご覧になったオロンコ岩とこの三角岩、もともとはひとつの岩だったのですが、中心部が波と流氷（りゅうひょう）に削られ、現在のような形になったとされています⁴⁸。

⁴⁸ 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第14集〉』, p. 37。

F14 ウトロ漁港

ウトロ崎（うとろざき）の東側に位置するウトロ漁港は、1951年（昭和26年）に着工⁴⁹され、現在は、ウトロ崎の西側に、ペレケ湾を埋め立てて新港地区の建設が進められています。

港の前に広がる海は、オホーツク海です。このウトロ港は、オホーツク海における漁業の拠点で、定置網漁業を中心とする沿岸漁業が盛んに行われています。特にサケ・マスは、全国でも有数の水揚げ量を誇っています⁵⁰。

また、ウトロ漁港は知床国立公園のオホーツク海側の玄関口でもあり、世界自然遺産・知床⁵¹を海から見学する観光船の発着所になっています。

こうした、北海道有数の水産基地、海の知床観光の拠点としての役割をもつほか、ウトロ漁港は、気象の変化が激しい知床海域の緊急避難港、災害時の海上輸送基地としての役割も有しています⁵²。

⁴⁹ 「ウトロ漁港の沿革」網走開発建設部公式ホームページ：

<http://www.ab.hkd.mlit.go.jp/kouwan/utoro/enkaku.html>（2011.09.07参照）

⁵⁰ 「第4種漁港 ウトロ漁港」網走開発建設部公式ホームページ：

<http://www.ab.hkd.mlit.go.jp/kouwan/utoro/index.html>（2011.09.07参照）

⁵¹ 2005年（平成17年）に日本で3番目の世界自然遺産としてユネスコの世界遺産リストに登録された。

⁵² 「第4種漁港 ウトロ漁港」網走開発建設部公式ホームページ：

<http://www.ab.hkd.mlit.go.jp/kouwan/utoro/index.html>（2011.09.07参照）

F15 神社山の古代墓地遺跡

ウトロ市街地中心部に位置するこの岩山は、南側斜面に祠（ほこら）が位置することから「神社山」と呼ばれています。

ウトロに漁場（ぎよば）が設置されたころに、豊漁と海上安全を祈願して弁才天（弁天）を祭る社（やしろ）がここに置かれたと言われていました⁵³。もとは、江戸時代後期、このあたりの漁業を統括していた場所請負人（ばしょうけおいにん）・藤野家（ふじのけ）の番屋に付属する社（やしろ）であったとされています⁵⁴。

ところで、現状から推定することは大変難しいのですが、かつてこの岩山の北側斜面、ゴジラ岩側には、洞窟が存在しました。洞窟自体は、市街化が進む中で削られてしまい、現在は洞窟の原型をとどめていません。

かつての洞窟の奥にあたる部分は、現在では落石の危険性からフェンスで覆われていますが、手前の道路からその様子を確認することができます。この洞窟奥では、約2,000年前の縄文文化（ぞくじょうもんぶんか）から10世紀頃のオホーツク文化に至る複数の墓（はか）が見つかっています。このような、洞窟内に遺された墓地の遺跡は、あまり知られておらず、大変貴重なものです。周辺で発見されている古代の集落遺跡との関係を含めた研究が待たれるところです⁵⁵。

⁵³ 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 97。

⁵⁴ 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 97。

⁵⁵ 斜里町ウトロ遺跡神社山地点については、斜里町立知床博物館編(2009)『しれとこライブラリー9 知床の考古』北海道新聞社, pp. 175-182, p. 193などに詳しい。

F16 ウトロ漁業発祥の地

このあたりの前浜には、かつて和人によって設けられた番屋（ばんや）などの漁業施設がありました。番屋とは、漁場（ぎよば）の近くの海岸線に作られた作業場兼宿泊施設のことです。

こうした和人による商業目的の漁場（ぎよば）が、このウトロにいつごろ開かれたのかについては、はっきりとした記録がありません。ただ、松浦武四郎の『戊午志礼登古日誌（ぼごしれとこにし）』によれば、1858年（安政5年）、蝦夷地探検（えぞちたんけん）で知床岬（しれとこみさき）を訪れた帰り道に、ウトロ番屋に一泊したことが記されています⁵⁶。ということは、その当時には、この地に既に漁場が開かれていたことになります。

当時の漁業は、春のニシン漁、夏のマス漁、そして秋のサケ漁が中心でした。こうした魚は、北前船（きたまえぶね）で遠く本州方面へ出荷されていました。

1869年（明治2年）に、場所請負制が廃止されますが、その後、1980年（昭和55年）ごろまで、番屋の建物が残されていました⁵⁷。現在は漁港も造成が進み、この辺りに当時をしのぶ遺構は全く残されていません。

⁵⁶ 陰暦5月7日、陽暦6月17日にウトロ泊。秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 50、pp. 96-97 参照。

⁵⁷ 松浦武四郎没後百年記念協賛会・ウトロ漁業協同組合(1988)『ウトロ漁業発祥の地の由来』(現地説明板)。